

各種データベース間のデータ・レプリケーションと柔軟な転送を可能にし、データ統合を実現するツール

Focus

- ① 各種DB間、DB～クライアント間で高速なデータ転送・レプリケーション
- ② 強力な管理機能による柔軟な転送・レプリケーションの設定
- ③ 専用サーバーの設置が不要

重要性を増す 企業内のデータ統合

今や企業が成功するためにデータ統合は重要な課題である。企業間競争は、情報に基づく意思決定のためにリアルタイムに利用可能なセンター集中のデータベースを持つこと、既存の業務に負荷をかけずにデータが利用できる新しいアプリケーションを購入すること、企業データのアクセスとメンテナンスの総合的費用対効果と生産性を向上させることなどを常に強要している。

最も挑戦的なデータ統合の例として、多種類のプラットフォーム間にまたがる多くのデータベースからのデータ収集がある。そしてこのソリューションは、総合的なコストの低さ、既存システムとの親和性、インストールの簡単さ、使い勝手、オープンな拡張性に富む構造などで評価される。

既存のデータベースと関係する新しいアプリケーションを追加する場合、できるだけ現行システムからデータをレプリケーション（複製）してパフォーマンスへの影響を防ぎ、新しいアプリケーションが引き起こすであ

ろうトラブルから隔離すべきである。

データ・レプリケーションは、通常はサーバーにサードパーティのソフトを入れる必要はない。例えば、System i上でDB2を採用しているユーザーがWeb関連のアプリケーションを作る場合、SQL Server、MySQL、あるいはそれ以外のデータベースを用いてレプリケーションを行うことが多い。この手法を使えば、既存システムを混乱させずに低価格のデータベース・サーバーを用いて種々のインターネット・ツールを活用することが可能である。

多くの企業は複数のベンダーのデータベースを運用している。したがってデータ統合ソリューションは、それぞれのITサイクルで進化する異種混合環境の中で、容易にレプリケーションを実行できることが重要になる。

理想的なレプリケーションソフトは、DB2、Oracle、SQL Server、Sybase、MySQLなどの代表的なデータベース間の読み書きができるべきで、さらにいろいろなデータベースを、ODBC、OLEDB、.NET、JDBCなどのデータベース接続手順を介してアクセス可能であるべきだ。つまり、これらのツールはストアード

プロシージャを含むSQL機能を完全にサポートすべきなのである。

データ・レプリケーションの煩雑さを抑える

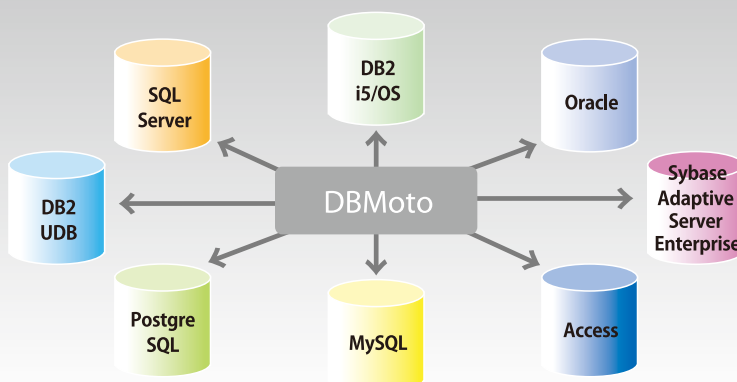
DBMoto（デービーモト、旧DB2motion）は、企業のサーバーとデスクトップ環境で必要なデータのレプリケーションと転送が可能である。

今日のビジネス・アプリケーションは以前よりもマルチ・データベースに依存している。それは、ユーザーへのリアルタイムな回答であったり、時間に厳しい製造要求に対する生産者へのデータ提供であったり、あるいは経営陣への最新の測定や経営レポートなどさまざまであるが、いずれにしてもキーのデータはコアのリレーショナル・データベースから提供されている。

企業は、データベース・プラットフォーム間でデータを移動させることが必要になる。リレーショナル・データベース・プラットフォーム間での高速なデータ提供は、アプリケーションの高速化をもたらす。DBMotoはこうしたニーズに対応するツールである。しかも、企業データを効率よく転送するにはデータベース・サーバー環境の専門家が必要になるが、DBMotoはデータ・レプリケーションの煩雑さを抑え、良好なパフォーマンスを提供する機能を持つ。

DBMotoがサポートするデータベースは、DB2/400、DB2/UDB、Oracle、SQL Server、Sybase Adaptive Server Enterprise、MySQL、PostgreSQL、Accessなどである（図表）。

図表



リアルタイム・データ・レプリケーション

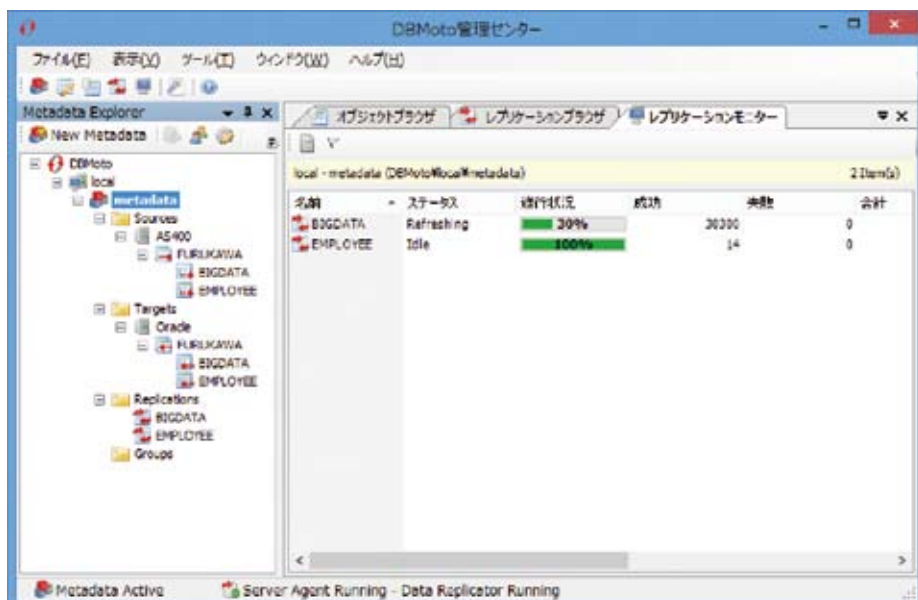
DBMotoの「DBMoto管理センター」(画面)は、ソースとなるデータベースとターゲット・データベースとの接続の確認、ターゲット・テーブルの作成、レプリケーション・プロセスの設定を簡単に行えるウィザードである。レプリケーション・マッピングとルールは、どのデータベースにもストア可能な「メタデータ・データベース」として保存可能である。DBMoto管理センターはデータベース、テーブル、コラムをドリル・ダウンで指定できるグラフィックなポイント・ツー・クリック・インターフェイスを持っている。

DBMotoは、「リフレッシュ」「ミラーリング」「シンクロナイゼーション」の3つのモードでデータベース間のデータ・レプリケートが可能である。

リフレッシュ・モードでは、ユーザーが指定したマッピング・ルールに従って、DBMotoは大容量データをターゲット・データベースにライトすることができる。ミラーリング・モードでは、ログ/ジャーナル管理をベースにしてリアルタイムの差分レプリケーションを実行する。シンクロナイゼーション・モードでは、DBMotoの双方向のミラーリング機能を使用して差分データのマージまたはシンクロナイゼーションを提供する。ユーザーはDBMotoに対して、どのモードで使用するかを指定できる。

柔軟なレプリケーションと転送コントロール

さらに、ユーザーはルールとマッピングを指定して、データ・レプリケーションと転送を定義することができる。また、他のソリューションと異なり、プログラミングやスクリプト技術を使用してデータ・レプリケーションと転送の定義を行えるのもDBMotoの特徴である。DBMotoは、ソース・フィールド・



画面：DBMoto管理センター画面

バリューをターゲット・テーブルにレプリケートする「自動マッピング」と「マニュアル・マッピング」の2つのマッピング手法をサポートする。

パワーと使いやすさ

DBMotoは、洗練されたデータ変換によりソースとターゲット間の大量データ転送を可能とする。このツールは、小企業あるいは大企業の各部門が行う統合システムの設計・展開・管理のための多機能な各種定義が可能である。そして、そのマッピング機能は、使い方や管理が簡単のため、スタッフのスキルにかかわらず生産性を向上させると言えるだろう。DBMotoはプロジェクトリスクを減らすだけでなく、システム変更や新しい要望によって引き起こされる影響も最小化すると考えよう。

軽さと柔軟性

ほとんどの場合、データ統合製品は専用エンジンを用いてデータを処理するが、DBMotoは軽量であるため、大規模な専用サーバーを設置する必要がない。データ変換はインタラクティブに行われるか、あるいは今後長期間にわたって業界標準になると見られる.NETを用いた単純なAPIから呼び出される。

グローバルに活動する大企業にとっても、数台のPCサーバー上にデータを走らせている中小企業にとっても、データ統合はビジネスのあらゆる状況で絶え間なく変化し続ける課題である。そうした中でDBMotoは、データベース統合プロジェクトのために信頼性が高く拡張性が必要なシステムを開発する全てのITチームの強力な力になると考えよう。

Product Information

●発売：2006年4月

●稼働環境：Windows 8、7等

●価格：オープン価格

Windows Server 2012、2008R2 等